

43年ぶりに北海道で開催された「全国湖沼河川養殖研究会」

酷暑であった令和5年もやや過ごしやすくなった、9月27日から28日にかけて札幌コンベンションセンターで「全国湖沼河川養殖研究会 第95回大会」が開催されました。この研究会は大正8年に滋賀県で「湖沼利用水産養殖研究会」として開催されてから、会員県の持ち回りで開催されてきました。北海道での開催は昭和55年以降43年ぶり4回目であったことから、直近の大会運営を参考に大会を企画し、コロナ禍以降3大会4年ぶりに対面を基本(Web配信併用)とした大会を開催しました。その結果、来場、リモート参加を含めて合計103名の参加者がありました。

大会は本研究会の会長である滋賀県水産試験場の酒井明久場長のあいさつで始まりました。続いて開催県代表として北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場の杉西紀元副場長、来賓として北海道水産林務部水産局漁業管理課の野田勝彦さけます・内水面担当課長、水産研究・教育機構水産技術研究所の鈴木敏之部長より挨拶をいただきました。

北海道立総合研究機構 水産研究本部 さけます・内水面水産試験場の隼野寛史場長が議長に選出され、「内水面漁業(資源)に影響を及ぼす要因と対策について考える～内水面漁業と養殖業の明るい未来に向けて～」という中心課題でシンポジウムが行われました。初めに東北大学大学院農学研究科の片山知史教授から「内水面資源の調査研究の新しい手法と考え方について」と題した基調講演をいただきました。今後、内水面資源については、増殖・養殖による振興策のみならず、天然資源の再生産をいかに維持するか、乱獲を避けるための漁業管理をいかに行うかが課題となるだろうことを、小川原湖のワカサギにおける同年魚の大小二型の出現要因、内水面資源の調査研究の方向性、希少種や外来魚問題についての具体例を提示しながら述べられました。続いて東海大学生物学部の山口幹人教授より「石狩川下流域～石狩湾を中心とした魚類の生態と漁業生産」、NPO法人シュマリナイ湖ワールドセンターの中野信之理事長より「内水面漁業は地域再生へのかなめ～内水面魚種は地域の宝～」として話題提供をしていただきました。その後、本研究会の地域4ブ



図1 会場内の様子



図2 開催のあいさつをする滋賀県水産試験場の酒井場長

ブロックの代表者から発表された中心課題に関連する研究発表4題の内容も併せて片山教授が座長を務めて研究討議が行われました。ここではブロック代表者からの発表が多かったアユの産卵・降河行動、産卵・生息場造成などについて、山口教授からの話題にあった沿岸域に生息する魚類には内水面の環境が影響を与えること、中野理事長からの話題にあった内水面魚種は地域おこしの重要な材料になることその他、地球温暖化は内水面魚種にはマイナスばかりではなくプラスの面のあることも述べられました。まとめとして内水面の水産資源に対しては公設試験場にしか行えない生物・環境調査が重要であること、資源管理のためには漁業者の協力による漁獲情報の蓄積、産卵場の管理・造成が必要であること、そして、今後これまで起こらなかった事象に対する対応のためには研究者のみならず行政を含めたネットワークの構築が重要になるだろう、ということが結論づけられました。

研究討議の終了で1日目の日程は終了し、会場を変えて情報交換会が行われました。ここでは各県の参加者らとの歓談、率直な意見交換、情報収集が行われました。対面での議論では参加者の熱量を肌で感じながら各地域の内水面の状況や問題を共有できましたが、この熱量はWeb配信では伝わらないことが残念に思いました。

翌日は本研究会の総会から再開し、北海道立総合研究機構 水産研究本部 さけます・内水面水産試験場の前場長である佐々木義隆氏へ内水面魚種の増殖や資源管理、環境保全などへの貢献に対し感謝状と記念品が贈呈されました。続いて、次回大会開催は島根県で中心課題「次世代へつなげる内水面漁業～内水面漁業における資源管理の取り組み～」として開催されることが確認されるとともに、本研究会の各研究部会より活動状況が報告されました。次に中心課題関連以外の4題の研究発表が行われ、水産研究・教育機構水産技術研究所の中村智幸副部長より講評をいただき閉会となりました。

閉会后にはエクスカージョンとして「サケのふるさと千歳水族館」(千歳市)の視察が行われ、全日程が終了しました。

近年各地で低迷が続いていると言われている内水面漁業・養殖業ですが、本研究会での活動を通じて明るい未来につながることを祈念しております。

(2024年1月12日 北海道立総合研究機構 水産研究本部
さけます・内水面水産試験場 内水面資源部 真野修一)



図3 基調講演を行う東北大学の片山教授



図4 研究討議の様子